

## パネルディスカッション A

## 金 晃太郎氏報告へのコメント

奥平 忠志\*

## 報告概要

30年間道に勤めていて、今までこのような学会で発表するのは初めてで、どちらかというと今まで逃げてきたきらいがあります。しかし、道の宣伝としても必要と考えて、この度の報告をすることに致しました。

1869年開拓使が置かれて、すでに130年を経過しました。その間豊かな自然環境の恵みを受けながら、様々な社会経済活動を営んできた。一方、北海道を取り巻く環境問題、戦後の経済復興に伴う公害問題の発生、法的規制、企業の実質的努力などがあって、汚れた時期はあったが、今日まあまあよい状況に保たれているのではなかろうか。

しかし、今はゴミの処理問題、生活していく上でどうしてもゴミがでるといった問題から地球温暖化の問題、オゾン層の破壊の問題など地球規模の問題、さらに環境ホルモンの問題、これはつい数年前から雑誌などに取り上げられ大きな話題になってきた。これは地球温暖化問題と同様に次の世代に悪影響をもたらす恐れがあるという問題などと複雑に絡み合ってきている。

道民のみなさんはこのような状況の中で、環境についてどのように考えられているかという、かつては公害対策ということに関心があったが、最近は環境汚染、環境悪化の未然防止といった点に大きく変わってきている。さらに役所や企業任せではなく、NPO、NGO、そういう組織の方々も積極的に取り組んできている。

簡単に歴史を振り返ってみると、まず開拓期から終戦まで、開拓当初の人口は6万人から10万人程度であったのが、1900年には30年間で約100万人に増えた。昭和の初め、1925年に250万人と、どんどん人口が増えた。終戦後の1945年には350万人と

なった。食糧基地としてまた海外からの引き揚げ者の受け皿として北海道が利用された。その2年後に、地方自治法が制定され、北海道庁が北海道に変わり、さらにその3年後に北海道開発庁が誕生した。それまでは官選知事であったが、民選知事になった。その時、当時道の係長であった田中知事が初めての民選知事となった。国は社会党の政権下に金は出したくないということになり、国が直轄で開発を進めようということで北海道開発庁を開設した。本格的な開発計画が立てられた。日本の再興、復興、そのための食糧増産、その結果石狩平野などがどんどん変わっていった。地下資源の調査、電源開発が進められた。私の子供の頃は、馬追丘陵から石狩平野の篠津までケーブルカーで土を運んでいたという記憶がある。道東の根釧地区のパイロットファームの大々的な開発も進められた。

このような開発の結果、森林の破壊、湿原も埋め立てられた。1965年頃までに地方でも様々な工業が誘致され、問題が起きた。石狩川も工場の排水による汚染が進み、水綿という細菌が増殖し、それが死ぬと流され、水田に入り、被害をあたえた。札幌地域でも室蘭地域でも大気汚染が問題となった、この時は硫黄酸化物が影響をあたえた。また、都市の開発が進み、緑が減少した。

こうした問題に対処するため、道は昭和44年には北海道公害防止条例を制定し、規制を中心とした法的規制を加え、これが一定の効果をあげた。また、自然環境の保全が必要として、昭和45年に北海道自然環境等保全条例の前身としての「北海道自然保護条例」を制定した。全国的に見て、早くから自然保護の条例が制定され、比較的よく自然環境保全の手を打ってきたといえる。

\* 札幌国際大学

昭和50年代からは、公害から環境、出す人がはつきりしている時代からみんなで出すものに注意が向けられた。自動車の排気ガスや生活排水などがその例である。企業が努力した結果、みんなで出すものが目立ってきたといえる。環境悪化の未然防止ということが言われ、昭和53年には北海道環境評価条例が全国に先駆けて制定された。昭和60年以降、話題になってきたことは二酸化炭素など温室効果ガスによる地球温暖化、フロンガスによるオゾン層の破壊、硫酸酸化物、窒素酸化物の排出による酸性雨の問題などである。かつては、どうやってこれらの排出物を取り除こうかということではなく、どうやって遠くに飛ばすかということを考えていた。

北海道の大気や水の状況はどうかというと、比較的きれいであると言えます。大気中には窒素ガスが70%程度含まれていて、これが高温になると、空気中の酸素と結びついて一酸化窒素になり、さらに変化して二酸化窒素になる。これを様々なところで測定しているが、北海道では全国の年平均基準値を下回り、半分以下となっていて、特に目立った変化はない。二酸化硫黄も規制で減って、ほとんど横ばいの状態である。降下煤塵の量も規制が始められてから着実に減ってきている。

水についてみると、河川、湖、海での環境の項目（健康に関係する項目と水の有機的汚れ）の中のBODとCODをみると、河川にはBODの環境基準を適用しているが、これによるときれいな河では厳しく、汚れている河はそれなりの基準を適用している。湖や海ではCODの基準を適用して、測定している。それぞれの基準値をどの程度達成しているかを見るのが測定の目的である。だいたい九割程度は達成していると言いたいが、湖の達成率が悪い。湖は閉鎖的な水域であるために打つ手が無いということが実情である。特に汚いのは、釧路の春採湖で悪化条件が重なっている。

一般的に見て、北海道の水や大気は比較的きれいであると言ってよいのではなかろうか。そのほか話題になったのは、ゴルフ場の農薬問題で、平成元年の調査によれば、18ホール1トンを使っていた。現在は300kgに減らしている。

北海道は総じて環境問題ではきれいで、森林が北海道では70%、そのうちの65%が天然林であり、

自然が比較的良好に保たれてきたのではと知っている。これから世界の人口が100億に達するとすれば、大変な問題が起きることが懸念される。

#### フロアでの質疑応答・意見

質疑：北海道でローカルアジェンダがつくられてきたかが一点目、農地の放棄が急速に増えているが、環境の保護の立場からどのように考えておられるか。

応答：ローカルアジェンダとしては、北海道版の地球温暖化防止と言うことで、9.0という基準値を示してきた。北海道はどうして高いといわれるが、森林の多いことから高い。農地放棄の原因は、減反して放置した方が補助金をもらえてよいが、他の作物を作った方が損であるといことが考えられる。

質疑：金さんのお話では、全般的には環境が良く保たれていると言われたことが話の基調であったと思いますが、本州の環境に較べてよいということで、まだ大丈夫ということだが、それでよいのかという疑問を持つ。千歳川の改修工事で、その流域の天然林に住宅団地を造成し、エコタウンと呼んでいるが、その結果自然環境が失われ、何がエコタウンだと言いたい。どうも北海道の環境保護についてはあんのんとしていられないのではなかろうかと考えています。

応答：まことにごもつもの指摘ですが、住宅地やレクの施設が造られているが、天然林の8割が農地に変わり、北海道の森林が71%であり、これが多いのか少ないのか、残すべき森林がどこか決まっていない。限度のとらえ方が様々である。千歳のように森林を切ってしまった所もあるが、切った駄目だということについてはなかなか難しい。

意見：金さんの発表はショックで、私は今稀少野生動植物保護条例をつくるための議論を進めているが、北海道だけでも絶滅状態にある数百種の動植物がある。金さんの発表は非常に楽観的で甘すぎると思う。本州に較べてよいのは当たり前で、本州は2,000年かけて潜在植生を破壊してきたが、北海道はたった百年で壊してきた。そのスピードを考えると、すさまじいと思う。そこをよく認識して欲しい。森林は数字で示すものではない。生物多様性を考えることが重要である。